
楽園はサマー

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園はサマー

【Zコード】

Z3760D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

僕たちは一月の頭にまとめて有給を取り、南国の常夏の島ブルービル島にバカンスに来ていた。空港からホテルまでタクシーに乗り、むせ返るよう暑い島を走り抜ける。ホテルに着いた僕たちは予約していた部屋に入つて、冷えた缶ビール片手に寛ぐが……。

「暑いな」

「そうね。さつきから喉がカラカラ」

「水分補給大丈夫?」

「うん。ミネラルウォーターの入ったペットボトル、ちゃんと用意してあるから。それ飲めばOKよ」

僕たちは太平洋の彼方にある常夏の楽園、ブルービル島に來ていた。島は年中夏の陽気で、気温が三十度を下る日は早々ない。

空港に降り立つた僕たちはタクシー乗り場でタクシーを一台拾い、郊外のホテルへと向かつた。

「真一郎」

「何?」

「お腹空いてない?」

「うん。相當前に機内で食事出されて、それ食べただけだからね。空いてないって言えば嘘になるな」

僕がそう返すと、今回のバカンスの相方で、恋人の敦子が笑つてみせた。笑うと、歯並びのいい白い歯が仄ほの見える。

僕が、

「ホテルに着いたら、シャワー浴びるか、酒飲むかしようよ」

と言い、汗だくなつたTシャツをバタバタと扇いで、少しでも汗が蒸発するように工夫したが、それでも玉のよくな汗がどんどん出てくる。

僕たちは南国のリゾート地特有の、綺麗に舗装された道路をホテルまで向かつた。

僕は普段新宿の会社で営業をやっていて、敦子は同じ会社の経理係だった。簡単に言えば社内恋愛というやつだ。

僕も敦子も同じ二十八歳で、同期入社だから、もう付き合い始めて六年になる。会社に入つてすぐに行われたコンペで僕たちは知り

合い、意氣投合したのだ。

僕たちは一月の頭にまとめて有給を取り、南国で誰にも邪魔されないバカンスを楽しむつもりでいた。

ホテルは島の郊外にあり、不便な場所にあつたが、予約した高層階からは綺麗な海が見えるらしかった。僕はバルコニーから海を見るのを楽しみにしていた。

タクシーはホテルへとひた走り、やがて目的のホテルに着いた。僕は敦子を先に降ろし、自分が財布からさつき両替したばかりの現地のお金を取り出し、運転手に手渡す。

「サンキュー」

運転手はそう礼を言い、僕たち一人が降りたことを確認して、バタンと後部ドアを閉めた。

僕たちは手を繋いで、ホテルのロビーへと入つていく。

フロントで、僕が片言の英語を使って予約した旨告げると、ホテルマンにも通じたらしく、カードキーを渡してくれた。

僕は鍵を受け取ると、敦子の手を引き、ロビーの端にあむエレベーターまで歩く。

宿泊先是十一階の一〇七号室だった。

僕たちはエレベーターに乗り込み、ゆっくりと上階を指した。六、七、八……。

階数表示が徐々に上がり、僕たちは目的階である十一階に近づきつつあつた。

キー。

途中で誰も乗つてくることなく、エレベーターは十一階に着き、僕たちはボックスを降りた。

フロアには豪勢な絨毯じゅうたんが敷かれていて、各部屋まで続いていた。

僕たちは手を繋いだまま、自分たちが予約を入れた部屋まで歩いていく。

南の島だからか、時間がゆっくりと流れていた。

部屋の前まで来ると、僕が持っていたキーをシリンドラーに差し込

み、開錠する。

入った室内は一際豪勢だった。使うにはもったいないぐらい綺麗なクローゼットと、入念に掃除が施された洗面台とシャワールーム、それにツインのベッドが置いてあり、冷蔵庫も備え付けてあった。僕はすぐに冷蔵庫に行き、中から缶ビールを一本取り出して、一本を敦子に手渡す。

「冷えてるうちに飲もうよ」

「うん」

敦子が頷き、僕も缶のプルトップを捻り開けて、炭酸がたくさん入ったビールを飲む。日本のものとは微妙に味が違っていた。僕が荷物を置き、飲みかけのビール缶片手にベランダに出ると、そこからは美しいビーチが臨めた。あまりの綺麗さに思わず見惚れてしまう。

敦子は先に着替えを済ませ、シャワールームへと入っていったらしく、辺りには女性の下着のにおいが漂っていた。

僕はビールを丸々一本飲み干すと、冷蔵庫で酒を漁り始める。出張などホテルに泊まる機会があると、いつもこればかりなのだ。しばらく漁つていると、度数の高そうなウイスキーが見つかったので、備え付けてあつたグラスに注ぎ、ミネラルウォーターでハーフに割つた。

そして製氷皿から氷を取り出し、数個浮かべて飲み始める。

やがて時間が過ぎ、昼間高い位置にあつた太陽が水平線の彼方に沈み始める頃、大人たちにとつて洗練された夜の時間が訪れた。

僕がすっかり酔つ払つていると、シャワーを浴び終えてすっかり

寛いでいた敦子が、

「真一郎」

と僕の名を呼んだ。

「どうかした?」

「どうかしたって飲み過ぎじゃない。お風呂入つて、お酒臭いのを落としてきなさいよ」

「分かった」

僕が頷くと、敦子が、

「後でたっぷりと楽しみましょ」

と言い、小悪魔のような笑みを浮かべてみせた。

僕が着替えを持って、風呂場に入していく。中には若い女性が発する匂いとシャンプーやリンス、それにボディーソープや洗顔フォームの匂いまでが混じって、残り香となり漂っていた。

僕はそれを嗅ぎながら、

“雌猫の香りはいいな”

と率直に思った。それぐらい、成熟した大人の女の体臭は大人の男にとつて不快にならず、逆に積極的に嗅ぎたい類の代物だった。頭から真水を被り、髪の毛にシャンプーした僕は、体中を一通り洗い終え、付いていた汗やにおいを洗い落とした。

仕上げにシャワーで全身を洗つて、用意していたタオルで体中を吹き、ゆっくりとリビングに戻る。

不意に体に冷気が吹き付けてくるのを感じた。敦子がクーラーを入れてくれていたのだ。

頭を拭き終えたタオルを肩や筋肉が引き締まつた二の腕を始めとする体に掛けた僕は、ツインのベッドの敦子の方ではなく、自分が眠る方に行き、敷かれていたシーツにダイブした。

敦子が部屋のベランダから夕日を眺めている。僕が息を潜めて背後から近付いていき、ゆっくりと抱きすくめた。

敦子が、

「いつまでもそうやつて抱いてて」

と言うと、僕が、

「分かった」

と返し、抱く手を強めた。

水平線上には鮮やかな夕焼けがある。まさに常夏の島の象徴だつた。

僕が敦子を抱きしめると、抱かれたままの敦子が、

「……この島はすっかり夏ね

と呟き、フフフと笑った。

僕は思わず体に掛けていたタオルを落としてしまう。そして落としたのにも気付かず、無我夢中で敦子を抱き続けた。

僕たち一人の休暇は始まつたばかりだった。

その夜。

ホテル一階にあるレストランで食事を取り終えた僕たちが、食事後部屋に戻り、ベッドで時が過ぎるのを忘れて寝乱れたのは言つまでもない。

それから数日が経つたが、どうやら楽園の夏は終わりそうになく、いつまでも暑い日差しが照り付けていた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3760d/>

楽園はサマー

2010年10月8日15時56分発行